

かわねばラテンアメリカに未来はないと訴え、民主主義とは国民に幸福を与えるシステムでなければならず、軍人が国民に武器を向けるようなことは決してあつてはならないという硬い信念を持っていた。

ボリーバルの思想と信条は、今もラテンアメリカの自立と平和を求める人々をその根底で支えている。チェ・ゲバラが追求めた理想社会のイメージも、その原点はボリーバルの思想と信条にあつた。

■動きだしたラテンアメリカ

地球の反対側の情報が日本に届くことは少ないが、それでも、ラテンアメリカの胎動の断片は時折りニュースになつたりする。

南米大陸一周の旅を終えて日本に戻つた3週間後の9月15日、国連総会特別首脳会議でベネズエラ大統領チャベスはこう演説した。

「アメリカは国際法を侵害し続けている。我々は国連に対し、総会で決めたことを守らない国から立ち去ることを提案する」

国連本部をアメリカ以外の国に移転することを提案したチャベスは、続いてブッシュのアメリカを辛辣にこきおろした。曰く「テロとの闘いは必要だが、そ

れを違法な軍事攻撃の言い訳にしてはならない」「我々は米国の新世界秩序を必要としていない」、そして、「米国流の自由主義と資本主義が人々に不平等と悲劇をもたらした」とブチ上げたのだ。

それから2ヶ月後の11月、アルゼンチンのリゾート地、マル・デル・プラタで米州サミットが開催された。ブッシュが到着した日には5万人規模の反米集會が催され、アメリカ主導の「米州自由貿易地域（FTAA）構想」に反対する「民衆サミット」も開かれた。チャベスは反米集會で2時間演説し、「民衆サミット」に出席した。首都ブエノス・アイレスからマル・デル・プラタに向かう特別列車には「反ブッシュ」を叫ぶ一六〇人の文化人や運動家が乗り込んだ。その先頭には、サッカークの神様、マラドーナがいた。

12月には、反米と先住民文化の復権を謳うエボ・モラレスがボリビア大統領に就任し、二〇〇六年1月には、チリでも、中道左派のミッチェル・バチエレが初の女性大統領になった。そして、4月には、アメリカ国内でおよそ三五〇万人のラテンアメリカ人が「新移民法」反対の行動を起し、南西部の工場や農園の機能が麻痺してしまった。北の巨人は、獅子身中の虫を排除したくとも出来ない体になつてしまったのだ。

ブラジルは、ベネズエラに続いて石油

自給を実現し、ボリビアは、世界最大規模の埋蔵量といわれる天然ガスの国有化を推し進めている。南の国々が、自国の潜在的資源と伝統文化の価値に気づき、自分の足で歩き始めている。少なくとも、アメリカの言いなりになる時代が終わろうとしていることは間違いない。

(とい・じゅうがつ、作家)

—— 新刊のご案内 ——

アメリカのグローバリズムに抵抗するラテンアメリカの胎動にご注目を!!!

★「遙かなるゲバラの大地」(戸井十月)

新潮社 6月30日発売 1,400円

イラクの状況を知るのこれが一番!!

★「高遠菜穂子イラク報告—命に国境はない」(DVD.3,000円)

郵便振替口座：02740-7-77328 加入者名：シアターエム

★「イラク女性 リバーベンドの日記」

(著 リバーベンド・訳 細井明美) 480円 送料込

郵便振替口座：00170-6-296760 加入者名：イラク子ども健康基金

今、ラテンアメリカが面白い

戸井 十月

二〇〇五年の5月から9月まで、およそ4ヶ月かけて南米大陸をバイクで一周してきた。改めて世界を旅し直そうと始めた、〈五大陸走破行〉の第4弾である。

南米大陸を旅すること自体に不安はなかった。そこが、人間同士のコミュニティケーションが成立しやすい土地であることを知っているからだ。一九八七年から八八年にかけて北南米大陸を縦断し、九一年には一周もした。だから、そこがとても人間臭い土地であることは知っている。ラティーノやラティーナの具体的な顔がいくつも、すぐ浮かぶのだ。人の表情を思い浮かべることができる土地への旅には、不安も心配も少ない。結局、旅は出会う人次第なのである。

ラテンアメリカ諸国は、その根っこではどこも反米である。表面的な仕草は別として、心の底からアメリカを好きな国など一つもない。散々痛めつけられ、搾り取られてきた国に敵意を抱くのは当然だろう。

表の庭はよく手入れし、裏庭は腐らせておけというのが、中南米に対するアメリカの一貫したやり方だった。腐った権

力を操って甘い汁を吸い続けてきたのである。しかし、いつまでもアメリカの裏庭に甘んじてはいないという気運がラテンアメリカ全体に高まってきている。キューバはもちろんだが、ベネズエラもブラジルもアルゼンチンも、最近の政府は反米・反グローバリズムの路線を選んでいるし、チリやボリビアもこれに続いている。裏庭でくすぶっていた火が、野火のように広がり始めているのだ。

例えば、南米大陸の北端に位置してカリブ海を望むベネズエラ共和国。現大統領のチャベスは豊富な石油資源を武器に、反米・反グローバリズム路線を突き進んできた。キューバのカストロとも仲が良く、石油を提供することでキューバのエネルギー危機を陰で救ってききた。

■ラテンアメリカの自立と平和

ウーゴ・ラファエル・チャベス・フリアスは元落下傘部隊の中佐で、一九九二年のクーデターに失敗して投獄されたが、アメリカ主導の「新自由主義」による格差の拡大に不満を抱く貧民層の支持

を得て九九年に大統領に選ばれた。チャベス政権はボリーバル憲法という名の新憲法を制定し、国名をベネズエラ共和国からベネズエラ・ボリーバル共和国に変え、大統領権限の強化、一院制への移行、農地改革、石油公団への統制強化、貧困層への無料診療制度の整備などを推し進めた。また対外的には、他のラテンアメリカ諸国との連携を強めるための「米州ボリーバル主義代替政策」を打ち出し、キューバと連携しての識字運動、カリブ海諸国に対する石油の供給、中南米を対象とした「飢餓撲滅のための同盟」への一〇〇億ドル供出、ラテンアメリカ諸国内の一次産品と製造業間の連携の確立、ブラジルやアルゼンチン、ペルーとの石油共同開発を目指した「ペトロスル」の設立、アメリカの巨大メディアに対抗するための南米共同出資による「テレスル」設立などを次々に具体化していった。

チャベスは、これら一連の反米路線の実現を、「南米解放の父」と呼ばれるベネズエラ人、シモン・ボリーバルにちなんで「ボリーバル革命」と呼んでいる。一九世紀始めに南米大陸北部をスペインの植民地支配から開放したボリーバルは奴隷制の廃止を主張し、貧困層のためにラテンアメリカ統一の必要性を説いた。ボリーバルは当時既に、中南米の国々が団結してヨーロッパやアメリカに立ち向